vol.271

mj "馬は馬方、餅は餅屋、情報はマック"
THE MAC JOURNAL
三菱商事アグリサービス株式会社

◆2007年5月23日発行ラインナップ◆
・コメで走る車の時代
・改正種苗法にご注意！
・ｲﾝﾃﾙﾒｯﾂｫ：ルーキー登場

コメで走る車の時代

～バイオマス時代の到来－地球温暖化に警鐘

５月４日、気候変動に関する政府間パネル（IPCC；Intergovernmental Panel on Climate Change）は、地球温暖化の結果「21世紀中に地球の平均気温が最悪の場合6.4℃上昇する」と発表した。因みに約２℃の平均気温の上昇で、植物および動物種の20～30%が絶滅する可能性が高くなると予測。この100年間で6.4℃も気温が上昇するということは地球の歴史においてどの程度の変化なのであろうか？

約２万年前の最終氷河期は、現在より気温が５℃程度低く、その後約１万年かけてほぼ現在の気温まで上昇した。これは、100年あたりに0.05℃の気温が上昇したことに相当するが、今後100年間に気温が約6.4℃上昇するということが、いかに急激で異常な変化であるのかが分かる。

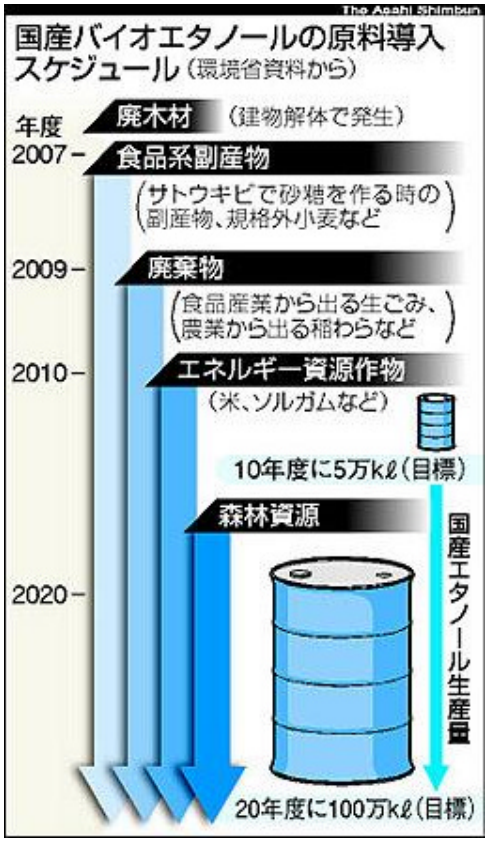
バイオ燃料は地球温暖化抑制に貢献

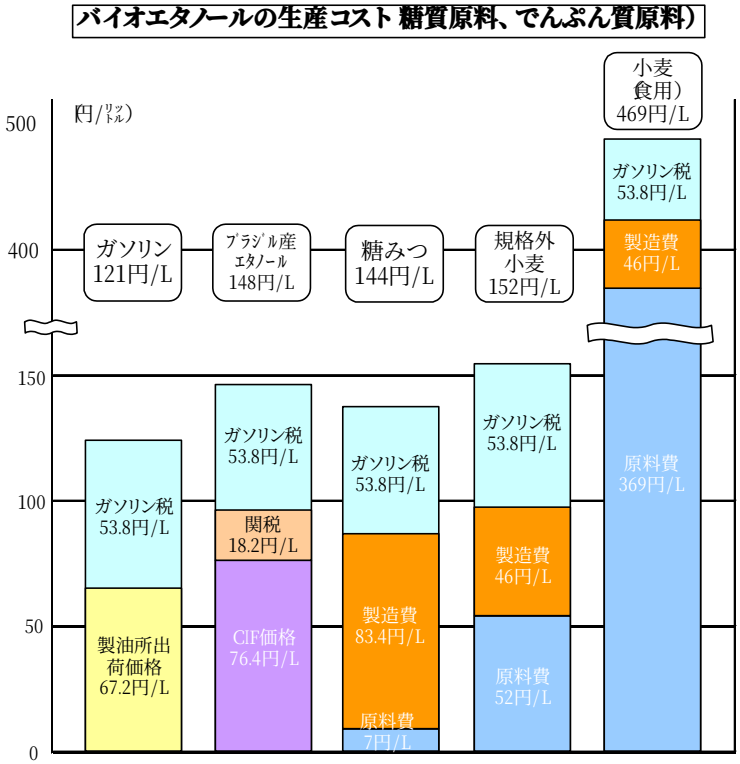
「環境保全と経済の発展が地球規模で両立する社会」では、この6.4℃の上昇を約1.8℃（1.1 ～2.9℃）の気温上昇でとどめることが可能と予測している。日本政府は、20年後にバイオ・エタノール100万ＫＬの生産するシナリオを発表した。

バイオ・エタノールの生産コスト（糖質原料、でんぷん質原料）は、下図のとおり06年６月１日現在のガソリン卸売価格121円/Lに対し、ブラジル産エタノール148円/L、糖みつ144円/L規格外小麦152円/Lで製造コストが高く、技術的な開発が求められる。

ここで脚光を浴びてきたのが、耕作放棄地を有効活用したコメからのバイオ燃料である。コメからバイオ・エタノールの生産を促進することで、二酸化炭素をはじめとする温室効果ガスの適切な抑制対策を取

（次ページへ続く）





（前ページより続く）
ることが可能だ。コメのみでなく稲藁なども利用できる。今後、資源作物等からもバイオ燃料を製造する低コスト生産技術の開発が期待され、「バイオ燃料」は、国家戦略として関連６省が連携し、地域発の事業として環境事業を政府系の農林公庫、中小公庫などが支援する。国産バイオ燃料の生産によって、農業と産業が共生し地方が活性化するのを期待する。

-*-*-*